

剣
旗と
城と

城の巻

柴鍊三国志(三)

剣と旗と城

城の巻

柴田鍊三郎

新潮社版

剣と旗と城（城の巻）

昭和三十九年十月十九日 印刷
昭和三十九年十月二十三日 発行

定価 二九〇円

著 者 柴田 錬三郎

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(280)二三番(大代)
振替東京八〇八番

乱丁・落丁のものはお
取替えいたします。



劍と旗と城　城の巻

——柴鍊三国志(三)——

一

いまにも、粉雪を舞い散らせて来そうな、地上をおしつけるようにひくく降りて来た鉛色の空の下を、二つの人影が、歩いていった。

眉間景四郎と美園であつた。

一月あまり、紀州の海辺にある温泉で、景四郎は、傷ついた身を、憩わせて来て、これから、美園をつれて、京に入ろうとしていた。

ひさしぶりに、近江の平原へ出て、景四郎の身も心も、軽かった。

何か——なぜか知らぬが——おのれの行手に、大きなものが待っていてくれるような気がする。

こんな爽やかな予感、生れてはじめて、胸中に湧いたのである。

寒気のはりつめた冬景色の中を、歩み乍ら、胸中に、春風の鳴るような明るさがあるのは、予感の正しさを意味しているのではあるまいか。

ふと——。

気がつく、美園が、十歩ばかりおくらせていた。

振りかえつた景四郎は、眉宇をひそめた。美園の顔に、苦痛の色があつた。曇天下の寒気のせいでない証拠は、杖にすがつて、よろばうように歩いているので、あきらかであつた。

景四郎は、ひきかえして、肩を抱くようにした。

「そなたは、やはり、わたしに、かくしていた」
そう云つた。

湯宿に滞在している時、美園は、ときどき、軽い咳をしたり、けだるそうな様子をみせた。景四郎が、問うと、笑つて、「風邪がこじれて、なおりませぬ」とこたえていたものであつたが……。

「そなたは、あの宿へとどまるべきであつたのだ」

景四郎は、美園の額へ、手をあててみて、火のような熱さに、おどろいた。

そのおり、遅わるく、白いものが、頭上に舞つて来た。「休まねばならぬ」

景四郎は、いそいで、視線をまわした。

山寄りの荒田の中に、小さな島のように、雑木林があつた。

——あの中に、家がある。

景四郎は、直感した。

「わたしの背中に乗るのだ」

景四郎は、すすめた。

美園は、ためらった。二人は、まだ、むすばれてはいなかった。景四郎が、自制したのである。

「乗るのだ、はやく——」

景四郎は、美園を背負うと、走り出した。粉雪が、急速に、繁く舞い狂って来たからである。ひとつには、景四郎は、おのが恢復した体力を試してみるつもりになっていた。

一里に近い距離を駆けて、雑木林に入った景四郎は、いささかの息切れもおぼえなかった。

地上は、もう白く化粧されていた。

家は、林の中に在った。

といつても、壊れかかった古いもので、人が住まなくなつて久しいらしく、入口で傾いた破れ戸には、蜘蛛の巣が、いっぱいにかかつていた。

住人は、合戦の雑兵に狩り出されたか、それとも、相次ぐ兵火のまん中に置かれたこの土地にいや気がさして、他の国をもとめて去つたのか。農具などは、そのままにのこされていた。

景四郎は、美園を炉端へ、横たえておいて、屋内をさがし、藁を蔭で包んだ夜具を見つけて来た。

「これに、寝て、まず、四、五日は動けぬぞ」

景四郎が、笑いかけると、美園は、眸子を潤ませて、黙つて、感謝の念をあらわした。

景四郎は、雑木林から、粗朶をひろつて来て、炉に火を起こした。

美園は、あかあかと照らされた景四郎の横顔を、黙つて、いつまでも、瞶めていた。

無心に、炎を眺めていた景四郎は、ふと、美園の視線を感じて、顔をそちらへ向けた。

「そなたは、あの斑鳩館から、出て来るべきではなかったのかも知れぬ。外の風にあたるには、からだが弱すぎた」

美園は、かぶりをふった。

「むざと、いのちを縮めるのは、ばからしいことだ。もう一度、あの館へ、もどる気にならぬか？ 京の都に、必ずしも、そなたの幸せがある、とは考えられぬ」

美園は、ふたたび、かぶりを振った。

そして、口をひらくと、
「貴方様のおそばで、死にとうございます」

と、云った。

景四郎は、

——この娘は、あの館にいた時から、自分のいのちが、あまり長くないのを、知っていたのではなからうか？

と、直感した。

「わたくしは、いまが、いちばん幸せでございます」

美園は、景四郎を、まばたきもせずに瞋め乍ら、云った。

二

「幸せとは、こんなものではない。幸せは、そなたが、健康をとりもどしたあかつきに、やって来る」

「いいえ。死ぬことは、すこしも、おそろしくはありません。……あの館に、一人きりでくらしているうちに、死が参ったのでしたら、それは、くやしゅうございましてしょう。でも、いまは、わたくしは、貴方様のそばに居ります。……女の幸せを、わたくしは、知りません」

「……」

景四郎は、美園が、いかにそう云おうとも、いまの状態が美園を幸せにしているとは思えなかった。

高い熱が、そう云わせているのではないのか。

「そなたは、死なぬ。断じて、死なぬ！」

景四郎は、強い語気で、云った。

美園は、しかし、微笑し乍ら、

「このまま、ねむって、もう、永久に目がさめなければ、よろしいと思います」

と、云った。

「ばかな！」

景四郎は、思わず、

「そなたは、まだ、わたしと契ちぎって居らぬのだぞ！」

と、云った。

すると、美園は、その言葉を待っていたように、

「捧げます」

と、叫ぶようにこたえた。

「そなたは、病人ではないか」

「いいえ、わたくしの心が、燃えているのでございます」

「ねむるのだ。ぐっすり——」

景四郎は、叱りつけるように、命じた。

「ねむりませぬ。貴方様のお顔を見ていとうございます」

高い熱が、美園を大胆にしていた。

「どうすれば、ねむるのだ？」

「わたくしを、抱いて下さいませんか？」

景四郎は、領いてやるよりほかはなかった。

いつか、宵闇がしのび寄っていた。

景四郎は、さらに、ひとかかえ、粗朶をひろって来

て、炉火を絶やさぬようにしておいて、薬夜具の中に入

った。

熱い美園のからだは、景四郎の腕の中で、軽かった。

美園は、顔を、景四郎の胸にうずめると、じっと動か

なかった。

景四郎は、炎のゆれる宙を、見据え乍ら、

——合戦を商いにし、平気で、討死者から太刀を奪

り、陥ちた城の女を犯していたおれが、このように、身

も心も捧げて慕われている。

そのことに、自嘲をおぼえていた。

この純真無垢な娘から慕われるにふさわしい男ではな

いのだ。

肉親の愛情など、全く知らずに育った景四郎は、つ

い、先頃まで、心と心をふれ合わせるといふことなど、

信じていなかった。

景四郎が、心の大切さを知ようになったのは、石の

長者の屋敷で、さまざまの珍奇な石と相対して、沈黙の

時間をすごすようになった時からであらうか。

といって、昨日まで、ついに、景四郎は、女性に對し

て心を傾ける機会を持たなかった。女性からも、慕われ

ていると告白されたことはなかった。

美園と、一月間、湯宿で、起き伏しをともし乍ら、

景四郎は、その氣持を生みはしなかった。いや、美園

が、いつか、自分に対して愛情をそそいでくれているの

も、氣づこうとはしなかったのである。

今日のはじめて、景四郎は、若い女性から、愛情を告げ

られたのである。

そして——

いま、そのたおやかなからだを抱いている。

ふっと、目がさめた。

屋内には、淡い夜明けの冷たい空氣があった。

景四郎は、いつの間にか、美園から腕をはなして、仰

臥し乍ら、睡っていた。

顔を向けると、美園は、すでに、目さめていて、大き

く睨子をひらいて、じっと自分を瞋めていた。

もう長いあいだ、睡っている景四郎の顔を眺めつづけた表情であった。

景四郎は、黙って、その額へ、掌てのひらを当ててみた。熱は、引いていた。

景四郎は、炬火をつけるべく、起き上ろうとした。とたんに、美園が、ひしとすがった。

身をすり寄せて、小声で、

「むごいおひと——」
と、呟いた。

景四郎は、その瞬間、この娘を愛しているおのれをきとった。この娘にめぐり会うために、三十余年を孤独で放浪して来たような気がした。

「美園！」

呼びさま、景四郎は、細いしなやかなからだを、双の腕の中へ抱き込むと、力をこめた。

「……うれしい！」

喘ぐように、美園が、もらした。

……景四郎の片手が、徐々にすべって、まとうたものの前をわけて、ひとむらの柔らかなしげみの蔭をさぐった刹那、美園は、男の襟もとを、しっかりとつかんで、本

能のわななきを示した。

そのみが、燃えるように熱く、滾たぎっていた。

三

夢ともうつつともない恍惚のさかいにいた美園は、不意に、景四郎に、我破がはと、はね起きられて、はっと、われにかえた。

景四郎の面貌かおは、鋭くひきしまっていた。

「軍馬が、こちらに、近づく！」

豊富な経験が、景四郎に、察知させていた。

美園は、耳をすましてみたが、すぐに、ききとれなかった。

「すくない軍勢ではない」

このあたりが、合戦になるのであれば、立退くのに愚図ぐずつてはいられない。

といって、病んでいる美園をつれて、遠くまでのがれるのは、おぼつかぬ。

——ままよ。この家に、居据ゐよっているか。

景四郎は、肚はらをきめた。

馬蹄ばていの音が、雑木林の中へ入って来たのは、それか

ら、程なくであった。

景四郎は、美園に動かずにいるように、命じておいて、戸口へ出た。

先驅隊らしく、十騎ばかりが、入って来ていた。野には、影しい軍勢が動いていた。旌旗が、朝風にはためいていた。

十騎は、馬から降りると、しきりに地形をしらべていたが、だんだん、こちらへ近づいて来た。

景四郎は、刀を携^もげて、土間に降り立った。

高い話し声の内容が、景四郎の耳に、はつきりと、ききわけられた。

この雑木林を、焼きはらってしまおう、という一人の主張に、他の者たちが、賛否をとなえていた。

家の前に来た時、一人が、

「人が住んでいるぞ」

と、云って、ずかずかと寄って、戸を蹴倒した。

土間にうっそりと立っている景四郎を発見して、ぎよつとなつて、身がまえた。

他の武者たちが、駆け寄って来た。

「なんだ、お主は？」

そう問われて、景四郎は、

「ここに、住んで居る」

と、こたえた。

「即刻、立去れ。この雑木林を焼く」

一人が、命じた。

すると、となりの者が、

「こやつ、敵の草（忍者）ではないのか？」

と、叫んだ。

「わたしは、ただの牢人者だ。病人がいるゆえ、焼かれるのは、困る」

景四郎は、云った。

「病人は、背負うて行け」

「馬をお借りできれば、すぐに立退く」

「たわ言を申すな！」

敵の忍び者ではないか、と疑った者が、いきなり、抜刀した。

「出い！ 面倒だから、斬る！」

景四郎は、あるいは、こうなるかも知れぬ、と覚悟していた。

おのれ一人ならば、いくらでも、馬を奪って、のがれてみせるが、美園をつれてはいる限り、それは不可能であった。

といつて、對手は、合戦直前の氣負い立った武者たちである。

生命乞いしても、見のがしてはくれまい。

第一、景四郎自身、生命乞いをするなどということとは、首がちぎれても、まっぴらであつた。

「戦さ前の血祭にする、と云われるのか」

景四郎は、おちついた口調で、云つた。

「そうだ！ 出い！」

「戦さ前に、お主らの方が、大死するということも、考えられる」

「黙れ！ 出い！ 出ぬか！」

喚きたてられて、景四郎は、ゆっくりと、三步足をはこんで、戸口の外へ立った。

一騎も、中へ入れてはならなかつた。

この場所を動かすに、闘うことになる。

——おれの力を試す時だ！

四

まず——。

景四郎は、彼方に無数の旗旗をなびかせている軍勢

が、この雑木林の中に起る乱闘に、氣がつくかどうかを測つた。

さいわいに、朝陽はまださして居らず、薄霧が流れていた。

彼方から、この雑木林の中の光景を、見わけることが、むずかしい。

勝負を、瞬時に、決定すれば、まず、氣どられぬ可能がある。

淡々とした白い朝の冷氣を吸って、五条の槍と五本の白刃が、すすきのように、景四郎に向かって、尖端を、揃えて、すこしずつ追つて来る。

景四郎は、かなり大きい雑木を後楯うしろたてにして、立つて、まだ抜かずにいた。

左方は、灌木が密生して、敵がまわり込んで来るのを、はばんでいる。

右方は、空いていたが、最近、薪にするためであらう、殆どの立木が倒されて、そのままになって居り、これが、逆茂木さかきの役目をはたしてくれている。

地歩ちほは、景四郎にとって、かなり有利であつた。

景四郎は、槍と白刃の横列へ、じつと冷たく冴えた眼まなこ眸を送り乍ら、

——勝てる！

と、おのれに、云いさせた。

孰れも戦場往來の、向う傷の痕を全身につけている武者たちであるが、正しい剣法を學んで居らぬことは、一瞥で判った。

合戦の修羅場で、こうした十騎二十騎に包囲された経験は、景四郎は、すくなくない。

その場合は、二三人を斬り伏せておいて、方角さだめずに、疾駆すればよかった。

いまは、一人のこらず、仆さなければならぬ。

こちらが、戦場経験だけの太刀使いしか知らなければ、到底それは不可能であろう。

さいわいに、景四郎は、いつの間にか、正しい劍の修業を成していた。

——勝てる！

と、おのれに云いさせる自信は、そのためであった。

呪号が、ほとばしった。

槍もろとも襲撃は、真正面からであった。

景四郎は、直立の姿勢から、突如、抜きつけの早業をもって、その鎧胸を薙ぎ斬ると、そのまま、その早業

を、次の敵への攻撃に、継続させた。

「ええいっ！」

気合は冴え、第二の犠牲者が、血煙りあげて、のけぞった。

味方の血汐をあびた荒武者たちは、

「おのれっ！」

と、目を剥き、齒を剥いた。

憤怒が、陣形をみだす、と意識するいとまはなかった。

景四郎の異常な強さが、渠らに、われを忘れさせた。

戦場によっては、業よりも力である。人間ばなれした凄じい暴力が、敵を圧倒し、勝利をおさめる。その闘いのみしか知らぬ荒武者たちは、無二無三に、討ちとろうと、躍起になったのである。

二人ばかりが、雄たけびしさま、槍をくり出して来たが、その地点には、もう景四郎の姿はなかった。

仆れた屍体をひと跳びに越えた景四郎の速影が、おのが好む敵めがけて、まっしぐらに、斬り込んでいた。

「ぎゃっ！」

「ああっ！」

唸る刃風の下に、断末魔の叫びが、殆ど同時に起って

いた。

具足が、草へ、重い音たてて、落ちた。

荒武者たちにとつて、これほどおそろべき敵には、はじめて、遭遇したことになる。

一合と交えずに、一瞬裡に、四人が斬られたのである。

あり得ることか、と疑つて、二人ばかり、茫然たる面持になつたくらいである。

はじめ、景四郎の態度を見て、

——強そうだ。

とは思つたが、これほどまで鬼神の働きを発揮するとは、想像もしていなかつたのである。

味方が、一人か二人、負傷する程度で、片づけられると考えていたのである。

とんでもない誤算であつた。

のこり六騎は、陣形をととのえなおし、この強敵を討ちとる手段を、いそいで、計るべきであつた。

ところが——。

味方のあまりのもろさが、なお信じ難いほどの惨めな敗北が、渠らから、その咄嗟に処すべき余裕を失わせてしまつたのである。

「おのれ！」

「こやつ！」

「くそっ！」

どの顔も、凄じい形相と化して、憤怒で顫えてしまつた。

五

ひとつには、なお、おのれたちが六騎であり、円陣におし包んで、遮二無二、襲えば、なんとかなる、という多勢心理が働いていた。

その背後にまわるべく、一人は灌木の茂みへ、躍り込み、もう一人は、自然の逆茂木を突破しようとした。

景四郎は、さつと、一間余をしりぞぎ、家の戸口に立つた。

これは、術策であつた。

正面の四騎は、喚きたてて、槍を、白刃を、ひらめかして来た。

灌木へ躍り込んだ者は、何かにつまずいて、どどつと前へのめつていたし、逆茂木を突破しようとした者もまた、具足が枝にひっかけて、身の自由を失っていた。

景四郎は、突進して来た四騎が、おのおのの具足をこすり合せるばかりに間隔をせばめたのを、待って、猛然と、反撃に出た。

美園は、このもの凄いい修羅景色を、家の中から、無双窓にすがって、のぞいていた。

ひと呼吸、ひと呼吸が、生命を削るような緊張であった。

朝の冷たい空間に、景四郎が、跳躍するや、

——あ！

と、反射的に、目蓋をふさいでいた。

——南無！

八幡の加護あれと祈ったが、絶鳴のあがるたびに、美園は、おのがからだに斬られたような衝撃を受けて、全身をびくつと痙攣させて、目蓋をひらかないではいらなかった。

景四郎が、なお、健在であるのを、たしかめて、

「ああ！」

と、叫ぶ美園の気力も体力も、殆ど尽きかけていた。喘ぎを吐く口は、からからに干からびていたし、手足の感覚もなくなっていた。ただ、額が燃えるように熱く、胸が苦しかった。

ふたたび——。
景四郎が、猛然と、敵にむかって、斬り込んで行った。

美園は、また、ひしと、目蓋を閉ざした。

けもののような声が宙をつらぬき、刃が人肉を截つ音が起った。

はっ、と目蓋をひらいた美園は、視力がうしなわれていることを、知った。

黒いものと、白いものとだけしか、視わけられなかった。

黒いものが躍り狂い、そのたびに、白いものが、きらっ、きらっ、と煌めいた。

そして、それが、消えるのに、長い時間を要しなかった。

美園は、眸子をいっぱい、ひらいていた。

しかし、しーんと、静寂にかえった世界が、美園の眸子に映しているのは、白い闇だけであった。

美園は、ようやく、その白い闇の中に、おぼろに、黒い影が、浮きあがるのを、みとめた。

黒い影は、いそぎ足に、こちらへ、向って来た。
と——。

美園は、

「お勝ちなされた！」

と、咳いた。

どうしたのか、自分のからだは、空気のように軽い、全くの無機物に選ったような感じがした。

安堵が、そうさせたのである。

美園は、ずるずると、その場へ、坐り込んだ。

同時に、胸の中にあつたかたまりが、のどに押しあがつて来た。

美園は、おびたらしい血を喀^せいて、板壁へ、ぐったりと凭^たれかかった。

入って来た景四郎は、このあわれな光景を見出して、「しまった！」

と、表情を一変させた。

美園が、このまま、死ぬ、と予感したのである。

寝かせて、絶対に動かしはならぬ病状と、見たが、それは、いまは、許されなかった。

十人の荒武者を斬った必死の働きを、むだにしてはならなかった。

遁れなければ、ならなかった。

「死ぬなよ！」

そう叫んでおいて、美園をかかえあげた景四郎は、武者たちが乗りすてている馬のところへ、走った。

どうやら、彼方の軍勢が、こちらの異変に気づいたらしく、二三十騎が、まっしぐらに、疾駆して来るのが、見えた。

六

「どうやら、また、合戦があるようだ」

近江平野の一隅に、数百年前から、ふしぎにそこだけ、兵火をまぬかれた寺院が、むかしのままの、静かで美しいはずまいをみせていた。

その伽藍^{がらん}の大屋根のわきにそびえる五重の塔の、最上階で、この独語が、つぶやかれた。

風の旅人——蹴鞠^{けまり}大夫は、あい変わらず、隠者のすがたをしていた。

そのかたわらに、小さい影を^{たなず}まかせているのは、幼い帝にまぎれもない。

「どちらかが、勝った方が、都へ、なだれ入るのである」

蹴鞠大夫は、沈鬱な面持で云った。

「また、家が焼かれ、無辜の民が殺される」

「大夫殿——」

少年は、庇護者を仰ぎ見た。

「いくさをなくすことは、できぬのですか？」

「人間が野望をすてぬかぎり、いくさは、永遠につづくであろうよ」

蹴鞠大夫は、少年の肩へ、手を置いて、こたえた。

この少年は、まだ、おのが素姓については、かたく口をつぐんでいる。しかし、蹴鞠大夫は、もう、その身分を推察していたし、あやまりはないことに確信をもっていた。

ただ、少年が、打明けぬかぎり、敢えて問わぬことにして、態度も言葉づかいも、そのままにしていたのである。

天下が、いささかでも、おだやかになる気配がみえぬかぎり、この少年を、高貴の座にもどすことは危険である、と考へて、この寺院に、かくしているのであった。

和平への曙光は、依然として、まだ、見えてはいないのである。

「どうすれば、よいのです？」

少年は、訊ねた。

「さあ、どうすれば、よいかな。……英傑が一人、彗星のごとく出現して、日本全土をきりなびかせて、主権を確立すれば——ということになるが、その英傑を生むには、おのずから、世界が、それをもとめる状態になつていなければならぬまい。いまは、あちらで殺しあい、こちらで殺しあい——血みどろの地獄図絵が、くり展げられている最中で、いかに一個の偉大な力を揮っても、これが、とどめられるものではない。暴風雨は、吹き荒れるだけ、吹き荒れねば、おさまるまい」

この折、山門をくぐって、ひょっこり、姿をあらわしたのは、煙観仲であった。

すでに、五重塔上の蹴鞠大夫を見つけた。

そこへ登って来た忍者は、

「合戦でござる」

と、告げた。

「戦うのは？」

「それがしが、曾てやとわれて居った津雲右衛門太郎秀郷と、小松重成と申す、あまり名を知られて居らぬ武將でござる。したが、小松重成は、美濃の奥の方から、猛虎のように、突如として、奔り出て参ったつわもので、兵略にかけては、右衛門太郎にまさるともおとらぬ、と